



MILANO-TARANTO



## ミラノ・ターラント参加記

伊藤綾英・かおる 井村友一

ミラノ・ターラントの主催者である、フランコ・サバティーニ氏の招待で同イベントにふたりの日本人が参加した  
ここに紹介する文と写真は、帰国後数ヶ月を経ても、今なお熱く胸に残る印象そのものである

## ■ 来年のゼッケンは35番、どうしてもまた走りたい！

伊藤綾英

素晴らしいミラノ・ターラント、大好きなイタリア、そして懐かしいイタリア。今から15年以前、イエローデスマ450のシートのデザインに一目ぼれし、それを手に入れることを願った私がイタリアへ行き、レースに出ることになった。

私にとってイタリア行きは3つのあこがれの旅であった。ひとつは大好きなイタリアのバイクを思い切り母国で乗ること、ふたつめは、これまた大好きなサッカー、それもワールドカップの情熱の残りを感じること、そして3番目はデザイナーとして、あれだけ素晴らしいデザインが生まれ続けるのは何故か知りたかったのである。

私と妻のかおるは今年2月に結婚したばかりで、今回のイ

タリア行きが蜜月旅行の代わりである。私たちは7月9日に成田を発ち、7月10日に宮田さんの待つペルージャで井村さんと落ち合う。

翌日サバティーニさんに会う。サバティーニさんの家の一室がベテランモトクラブの部屋として使われており、ここでミラノ・ターラントの準備が着々と進められている。壁面には多くの写真が飾られていて、その中には、若き日のドロヴィーニがモンディアルに跨がっている写真やミラノ・ターラントの写真にあのDr.タリオーニが交じっているものもあった。

私たちは、サバティーニさんがフレッチャ（コースの目印）を貼るのに一緒に連れて行ってもらった。サバティーニさんはさすが元カートのチャンピオン、とても若いのである。

800cc2気筒のシトロエン・ビザをものすごい勢いで走らせててしまう。スポレートでベントウリさんの店に寄った。ベントウリさんは1954年のミラノ・ターラントで175ccモンディアルで総合優勝した人で、500cc以外が勝ったのはこの年だけなのである。'54年のレースはドシャ降りの最悪のコンディションの中、約1300kmを13時間ほどで走ったそうである。何カ所かでガス補給をし、飲み物を口にするだけであとは走りっぱなしという、当時の公道レースの過酷さに驚かされる。

イタリアでは公道レースは日常茶飯事で、自転車レースのときはバイクや車が道をあけ、バイクレースのときは人

間はもちろん自転車や車が道をあけ、だれも文句を言わない。私たち日本人の感覚では考えられないことだ。

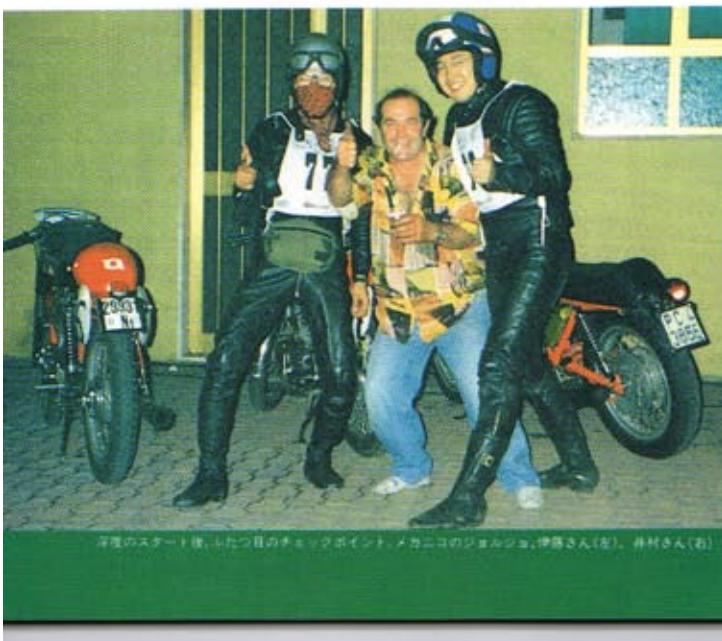
次にメカニコのジョルジョに会いに行った。日本でいえばレストア屋さんで、工場の1階にはたくさんのレストア済みのバイクが置いてある。しかし、なんといつても庄だったのは地下の倉庫である。古いバイクがごっそり、レストアされるのを待っているのである。MV2、バリラ、ルーミなどまあ珍しいバイクがゴロゴロ、バーツもゴロゴロしている。

ミラノ・ターラントのスタートは、ミラノ空港そばの公園にあるバール・リバヴェルデからである。宮田さんは125ccのモリーニ、井村さんは250ccのモリーニ、そして私は250ccモトビに乗る。今回は日本人が初めて出るということで、ビデオの取材を受けたりした。

16日深夜というより、正確には17日午前0時、バルテンツア（スタート）。2~3台ずつ各々決まった時間にスタートする。順位はラリー形式になっており、公式の時計に従った時間でレースは進められる。

ついに私と井村さんのスタートの番が来た。秒読み開始、チェック、クリア、スタート。トレ、デュエ、ウーノ、それ以降ソーラー！ スポットライトを浴びてキラキラしている中、見物人の壁の間で押しがけスタート、エンジンに火が入ったところで一気に夜のストラーダへと飛び出した。何か荷物がわからない私たちはとにかく走った。途中気がつくと先に出ていった宮田さんとサバティーニさんも抜いてしまっている。真夜中だというのにたくさんの人たちが手を振って応援してくれる。夜中に声援を受けながら、バイクをぶっ飛ばすことこれがこんなに気持ちいいなんて…、これは絶対クセになる。

やった、最初のコントローロ・オラーリオ=時間チェック(CO)に潜いた。思ったのも束の間、エンジンが止まってしまった。「どうした、ジャボネーゼ」と近くにいた人がかけよってくれる。問題はすぐに解決した。モトビはダウンドラフトのキャップが付いているが(水平車輌のため)、これのテヨークバルブが閉まりかけていたのである。



滑稽のスタート後、いたつ目のチェックポイント。メカニコのジョルジョ、伊藤さん(左)、井村さん(右)

急いでCOへ行く。COのやり方はこうである。COの係の人の所にラインが引いてあり、その手前10mぐらいの所にもラインが引かれている。その間を足を踏まず、エンストもせずに定められた時刻に通過し、その時刻をカードに書き込んでらわなければならないのだ。ベースも考えないでいっぱい走ってきた井村さんと私は、用意してあったパンや飲み物にありついで、COの時間を待った。無事COも終った私たちの所にメカニコのジョルジオがやってきた。「ピアーノ、ピアーノ、つまりゆっくり走れと言っている。レースは長丁場なので、もしバイクを壊したら、せっかくのお楽しみもそこで終わってしまうからだ。

ミラノをスタートして5時間あまり、そろそろ空も白々と明けてくる。朝もやの中で見たあのボーネ野の景色は、今でも忘れられない。広い麦畠が何本もの高い木によって区切られ、その脇には四角い建物が散在する。

イモーラの手前で井村さんのモリーニのチェーンが切れてしまった。残念ながら何ひとつ工具すら持っていないかったので、応急修理もできない。でも大丈夫、我々にはジョルジオがついている。井村さんは先に行ってくれというので、宮田さんと私はイモーラへ向かう。次のポイントで休んでいるとジョルジオがやって来た。#76のチェーンは直ったか聞くと、問題ないという。通訳の中島さんとおおむねかわってきただので、中島さんに詳しく説明してもらうと、どうもジョルジオと井村さんははぐれたらしい。心配なのでもう一度探しに行ってもらう。

イモーラからリミニまでひとり旅だった。途中、ほかの選手が見えるときはいいけれど、まわりにだれもいないと不安になる。2度ばかり停車して地元の人に道を教えてもらった。ビモータで有名なりミニでCOを受け、あとは本日のアリーヴォ（ゴール）ペザロに向かって走りだす。やったあ、無事着き、後から井村さんもなんとか到着することができた。

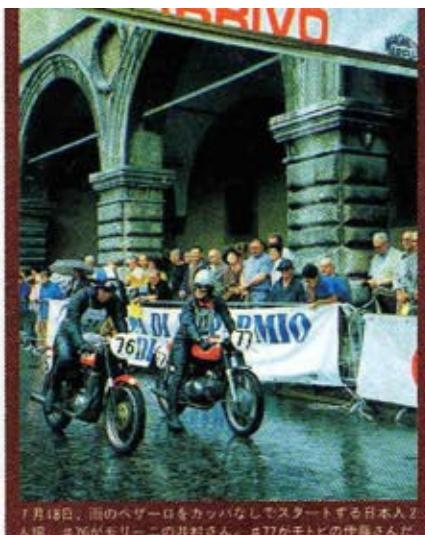
次の日は目も開けていられないような大雨、最高のコンディション。誰だ、イタリアは雨は降らない、と言ったのは。まずい、私と井村さんは雨具を持ってこなかった。ああ、いやだ、と思いながらスタート地点へ。皆雨具を着てフルフェイスをかぶっている。革ツナギでびしょ濡れのバカは日本人だけだと思っていると、宮田さんはしっかりと雨具を着ているではないか。聞けば、初めてミラノ・ターラントを見にいったときはどしゃ降りだったそうだ。きょうは路面が濡れているのでクラッシュスタート。雨の中ペルージャを目指す。この日は山道を抜けるコース。この日、昼食のときに元世界チャンピオンのウンチーニが遊びに来ていた、サバティーニさんに紹介してもらった。

午後、一時はやんでいた雨が、今度はもっとすごい雨になってしまった。雨具のない我々は頭から足の先までびしょびしょ、冷たくて寒くて、もうイヤだったけれど、とにかく走る。もう頭の中の思考は止まっている。ただ前を見て進むだけ。ゴーグルをしたままでは何も見えないようになってしまった。水が洗水のように流れている山道を下り続ける。と、右コーナーでふくらんでしまい、あっと思う間もなくフロントを滑らせてしまった。モトビは反対車線を越えて斜面の草むらへ転がっていった。急いでモトビを起こしチェックすると、ハンドルを少し曲げただけでした。でもアクセルワイヤアガおかしいぞ。井村さんやビデオカメラマンがかけ寄ってくれる。カメラマンがスロットルをばらしてワイヤを取り出した。これを引っ張りながら行けど言う。

実は、この様子はしっかりビデオに撮られていて、私が「撮るな、撮るな」と言ったのを録画されてしまい、私はイタリアでは、トルナトルナのイドで有名になってしまった。

アクセルワイヤを引っ張りながら走って、やっとのことでのCOポイントに着く。その場でジョルジオに応急修理をしてもらい、やっときょうのゴール、ペルージャに着いた。

3日目はカッシーノに向かうコースだ。ホテルの前を8時にスタート。気がつけば、サバティーニさんの家の前ではな



7月16日、雨のペルージャをカッパなしでスタートする日本人2人組。#76がモリーニの井村さん。#77がモトビの作谷さんだ。

いか。もしかしてサバティーニさんは、自分の家の前からスタートしたいばかりに毎年やっているのかな。

サバティーニさんが、きょうは4人で一緒に走ろうと言ってくれた。ペルージャから先是だれにも抜かれたことがないというだけあって、気を抜いたらすぐに走り出してしまう。デルタの町の途中の山道でかおるたちが待っていて写真を撮った。止まって記念撮影をするのだとと思っていたら大間違。サバティーニさんの右手はゆるまない。まるでサバティーニ教室の生徒のような気分だった。

デルタを抜けスプロート、ナルニ走り、午後ティボリのCOに着く。ここでの駐車場にはたくさんの人たちの美しいバイクが並べられていた。ラベルダの750SF、ピアンキの50年代軍用バイク…、その中に私の好きなドカの450デスマがあるのではないか。オーナーが乗ってみなど言ってくれる。駐車場を一周してくる。ひさしぶりのドカのポジションにうれしくなってしまった。小さいモトビにずっと乗っていたので、ふだんコンバクトに思っていたドカのポジションが大きく感じられたのが不思議だった。

次なるポイント、アルビーノを目指し4人の走りは続く。アルビーノではすごい人が集まっている。地元アルビーノから参加した選手が皆から祝福されている。日本では、公道レースすら理解されていないのに、ここイタリアでは多くの人が公道レースを楽しみにし、地元からの選手を自分たちの勝利に思っているのである。



左が宮田さん、右がサバティーニさん。このふたりの親切がなかったら、伊藤さん、井村さんは、完走はおろか参加すら難しかった。

この日の私はここまででは完璧だった。しかし、この後私は重大なミスを犯してしまう。COはOK、サバティーニさんはコーヒーを飲んだりして、まだスタートしそうになかった。気がつくと一緒にチェックを受けたはずの井村さんがいない。そのうち、宮田さんも時間がないからと先に行ってしまった。まだサバティーニさんは話し込んでいて、スタートしそうにない。時間もなくなり、しかたがないのでひとりで行くことにする。アルビーノの丘を下り、下の道へ出る。近所の人たちが芝生で見ていた。(ほんの少し右へ曲がっている所だった)どうしてそうになったのか、いまだにわからない。フロントが滑った。きのうの二の舞かと思ったときには私の体は右に投げ出されていた。2度ほどバウンドし、後ろへでんぐり返った。モトビは、モトビはどうなった…。確かに向車がこちらに向かって走っていたはず。モトビのフロントが「フィアットパンダ」の横っ腹に突っ込んでいる。パンダはドアの下へこみ、ホイールを曲げ、パンクしてしまった。私のモトビはリムが曲がり、トップブリッジは割れ、フォークは曲がってしまった。私のケガは大したことはなかったのだが、頭を打ってい

るため大事をとて病院で検査を受けた。別に異常はなかつたが、ショックのほうが大きかった。

その夜、サバティーニさんとの話し合いでこう決まった。どうしても走りたければ走ってもいい。ただしドクターの許可を得たねばダメという。ドクターは命のため1日休めと言った。なんとかお願ひして許可をもらつた。しかし何かあっても責任は持てないと筆書きがされた。

翌朝、ジョルジオのところに行き、謝った。「あんたの大切なバイクを壊してしまって申し訳ない」、ジョルジオはスペアのモトビに乗れという。ありがとう、ジョルジオ。

しかし、この日は朝からメチャクチャになってしまった。スタートしてすぐサバティーニさんたちとはぐれてしまい、全然違う方向に行ってしまった。ガス補給後押しかけがうまくいかずサバティーニさんが押してくれたのだが、そのときにサバティーニさんの手をエンダーでケガをさせてしまった。また、チェックのスタンプをもらったあと左に行かなければならないのに、フレッチャを見落としてまっすぐ行ってしまった。宮田さんがいいビームをつけてえらい勢いで追っかけてきた。このとき宮田さんのモリーニのエンジンに大変な無理をさせてしまったのだ。モリーニが止まってしまった。私を追っかけてきたときにめいっぱい回せてしまつたのが原因らしい。結局、宮田さんのモリーニはジョルジオのトランボで運ぶことになってしまった。

どうもきのうの事故のショックが尾を引いてまともに走れない。それとどうもエンジンの調子がよくない。フルスロットルにするとバラバラいいだす。そうこうしているうちに前



かつてのミラノ・ターラントで亡くなったライダーの慰霊碑の前で。#125はグッツィで走るベントゥリさん、右端がサバティーニさん。

を行く2人と離れてしまった。しかたがないのでゆっくり行くことにする。またエンジンのバラバラが始まつた。おかしいなと思って走っていると今度はガス欠になってしまった。一緒に走っていたオルガニツィオーネの人が自分のタンクを外してベンジーナをわけてくれた。しばらく行くとまたガス欠に…。途方に暮れていると今度はFJ1200のオルガニツィオーネのおじさんが待つてなに言ってベンジーナを買つてくれ、ファンタのボトルにベンジーナを入れて持ってきてくれた。ありがとう、これでなんとか走れます。

きょうはもうコントローロ・オラリオもティンプロも関係ない。あとはフォッジオでアリーヴォするだけだ。

残すはあと1日。それにしても宮田さんのモリーニが心配だ。明日走れないなんてことになつたら宮田さんに会わせる顔がない。トランボの前でジョルジオがヘッドを外した。ガスケットが吹き抜けている。スタッドボルトも1本折れていた。スタッドボルトが折れていたために密着不良を起こして、そこから吹き抜けたのだった。スペアのガスケットもないだろうにと思っていたら、ジョルジオがトランボからアルミ板を出してきた。さすがジョルジオ、百戦錆磨のメカニコ。もう心配するなど言ってくれた。

夜の食事の途中、表彰が始まる。まずはオルガニツィオーネとして参加車を支えてくれた人たちに感謝の念を込めて、ミラノ・ターラントの絵画をプレゼント。この人たちがボランティアである。次に、参加者全員に記念の盾をくれた。私の番が来て盾を受け取った瞬間、きのうの事故やきょうのトラブル、特に皆に迷惑をかけましたにもかかわらず最後まで応援してもらつたことを思い出し、胸がいっぱいになつて思わず泣けてしまった。#12のヴェスパGSのサブランナさんが友達を助けてたで賞でカップをもらつた。私もこうならなくっちゃいけない、偉いなあと思っていると、今度は私のことを呼んでいた。え、なんで？と思つて通訳の中島さんに聞くと、きょういちばん運ばれた人にだといつ。うれしいやら、恥ずかしいやら、ありがたいやら、情けないやら、また泣けてしまった。フォッジオのモトクラブの皆さんどうもありがとうございます。

ついにミラノ・ターラントも残すところあと1日。きょうこそは皆に迷惑をかけないことを誓い、フォッジオをスター



ベントゥリさんの店で、彼は1954年のミラノ・ターラントに175ccのモンティアルで総合優勝した伝説の人である。右が伊藤夫婦。

# 主人のバイク好きに、イタリアまでつきあう私

本屋で立ち読みしていた主人が、突然「いにしえのイタリアを走りに行くぞ」と言いました。また病気が出た、といやな予感、そんなこともすっかり忘れていた6月も過ぎたころにイタリア行きが決まってしまった。

さあ大変だ、何が何でもイタリアに行かなくては、とディスカウントチケットを手配するが容易には取れず、出発の前日に手元に届いたのは行きのチケットのみ、帰りは席が取れなければ帰ってこられないというものがった。

それでも行かないわけにはいかない。すべての段取りがついている、エイ!! なすがまま、運がよければ帰ってもらえるだろうと、飛び立った。

ローマ、テルミニ駅は夏期休暇の人々であふれているせいでどうか、とても暑い。テルミニからイタリア南端に乗るペルージャに向かう。車窓から見えるひまわり畑や小麦

畑…私の想像していたヨーロッパの風景そのままだった。現地ではスタートに向けて準備が進んでいた。まずはバイクをレンタル、決して安くはない値段だが、今回ばかりは顔で笑って心で泣いてあきらめた。主人のバイク好きにはあきれていないが、イタリアの地までつきあってしまう私も相当物好きなんだと心の中で笑ってしまう。

少々見かけに難はあるが、ミラノのスタートに並べば立派なライダーだ。参加者の大半が私からすれば父や祖父くらいの年代で、日伊独の戦争が昨日のことのように会話に出てくるのは少々目を丸くしてしまう。

夜中の0時という異例のスタートに、どこから現れるのか大変な人出だ。喧嘩りとすごいエンジン音の中、勝手のわからない私たちは、ベンジーナがない、メカニコはどこ、と右往左往してしまう。それでもなんとか無事にスタート

し、暗がりの中に消えていく。

それと同時に日本人グループをサポートしてくれるロッコさん夫婦が、「私たちも出発だ」とばかりに私の肩をたたいた。冷房嫌いのイタリア人と聞いていたので、乗せてもらった車の冷房に思わず頭がほこんでしまった。

夜が白々と明けるころ、主人のにこやかに快走する姿には、少しやける思いがした。

レース中には、一般的の車と接触軽減したり、迷子になる、燃料切れなどハプニングは数え切れないほど。そのたびにサポートしてくれる人々が頗もしく助けの手をさしのべてくれた。何度か落ち込みそうになるが、「不運な人に贈られる盾」をもらい、また完走への夢を膨らませた。

ターラントのゴールに入ってきたときは本当に夢でも見ているようだった。そのときの気分は、恐らく走り終えた人にしかわからないだろうと思うと、また感動してしまう。

また、来年への懸念ないイタリア行きを夢見て、主人は日夜働くのです。(伊藤かおる)

とした。ジョルジョのおかげで宮田さんのモリーニもバッタリ、きょうだけははぐれないようにしっかり走る。

お昼はビネットのアウトドアモード(サーキット)だ。テンントで昼食のバニーにかぶりついていると地元の新聞記者がやって来た。なんてミラノターラントに来たのかとインタビューされた。私はイタリアのバイクが大好きなんだと答えると、今度はなんで日本のバイクに乗らないんだと聞いてきた。イタリアのバイクが世界でいちばん気持ちがいいからだと答えると、不思議そうな顔をしていった。この記事が新聞に載っていた。日本人がイタリアのバイクに乗るということはとても不思議なことなのだろうか。

250クラスのサーキット走行の時間がやってきた。125クラスで宮田さんはサバティーニさんを追いついてやったと喜んでいた。無理は植物と自分に言いきかせてスタート、日増しに調子の出てきた井川さんのモリーニにあつといいう間に抜かれてしまった。

本日のお楽しみのサーキット走行も終わり、一路ターラントを目指して南下する。途中バーリのサッカースタジアムが横目に見える。このスタジアムは今年のワールドカップサッカーのために造られたもので、箱舟をイメージしているとか。さすがイタリアンデザイン、素晴らしい造形美だ。

南に下るということはどんどんアフリカが近くなるということだ。ところどころ焼けたような畑や南部イタリア独特の

サイロのような不思議な形をした塔のような家が見える。スタートしたところと比べると全然違う景色だ。

もうすぐ最後のアリーヴォ、ターラントだ。サバティーニさんが4人でそろってゴールしようと雪合戦してくれた。アリーヴォの文字が見えてきた。たくさんの人たちが集まっている。島田さんやかおるが待っている。アリーヴォまであとわずかというところで、サバティーニさん「いいなりスパート」。我々も負けじと追いかけが、結局4人バラバラでゴール。やったあ!! ついにイタリアのかかとターラントに着いた。

今夜は最後のパーティ。各クラスの表彰が始まった。私は250クラスで8位だったかな。アクシデントがあったにしては上出来でしょう。これで順位がよかつたら、皆に怒られてしまう。妻のかおるは選手のサポートの人に贈られる記念の絵皿を貰って上機嫌だ。参加者はもちろん、サポートする家族も、オルガニツィオーネとしてボランティアで選手を支える人たちも、皆楽しめようになっている。ミラノターラントはそういう素晴らしいイベントなのだ。サバティーニさんの復活にかける情熱とそれを手伝う皆さんたち、またそれを支える各地のモトクラブの人々、そして毎年ミラノターラントを楽しみにし応援してくれるイタリア中の人々、日本では絶対に考えられないだけに、ますますイタリアから離れられなくなってしまった。日本に帰ってきてから強く感じるのは、私はイタリアが大好きだということだ。



サバティーニさんの自宅で、印カードの分類やコース写真にマークするなどの手伝いをする日本人トリオである。

## いわゆる、ひとつの、神様って奴さ

井村友一

ミラノをメッザノッテ(夜中)にバルテンツア(出発)してから、いったいどれくらいたったのだろう。

僕とモト・モリーニは、真夜中の街道をひたすらペーパロに向けて疾走していた。寒さとサイレンサーなしの排気音とすさまじい振動とで、頭がボーッとしている。断続的な眠気で闇がわなながら、前方を行く小さな赤いテールレンズを見つめて、さっきバルテンツア前にサバティーニさんが言っていた言葉を思い出す…。ターラント、ロンターノ、ピアーノ、ピアーノ、そうだ、ターラントまでは遠いんだ。抑えて、あせらず、のんびりいこう。先是長いんだから。モリーニよ、ど

うかターラントまで僕を連れて行ってくれ。

東の空が白み始めた。長く寒かった夜のストレートが終わろうとしている。ついにボローニャだ。ドゥカティの故郷ボローニャへ轟音を轟かせて僕はやって来た。黄色い街路灯の続く大通りを、ジレラ・サトゥルノを先頭にしたイタリアンレッドの隊列が、石畳を蹴り、疾走する。71番のモトビが前へ出る。僕のモリーニが追う。すると左からとてつもない大爆音をとどろかせ、2台のサトゥルノと3台のファルコーネが団子状態になって抜いていった。500の連中は本当に飛ばしている。4~5台が一组になって、突風のように突き進んでいく。トルク感を伴った重く低い排気音とともに、生温かいほどのり甘いガスが僕を包み込む。71番のモトビと僕のモリーニ、伊藤のモトビは250らしい短い爆音を発しながら彼らの後を追った。

広い石畳の大通りを、夢のようなイタリアンレッドたちが駆逐していく。50年代、都市間公道レース華やかになりしころのイタリアが、今ここにある。血が騒ぐ、胸が熱くなる。アクセルを全開にして夜明けのボローニャに「お早う」を言う。ドゥオーモの前のローラリーを抜け加速する。今、この道は僕らのためにのみある。ここは、まさしくバラグイス・ロードだ。

しかし、ボローニャを抜け

イモラへ向かう交差点のフレッチャ(矢印)の指示で、ミニストラ(左)に曲がったときのことだった。突然、リヤタイヤから力が抜けてしまった。何だ、いったいどうしたんだ!? 原因はすぐにわかった。チェーンが切れてしまったのだ。一緒に走っていた伊藤や宮田が止まってくれたがどうしようもない。僕はいちはん後ろからついで来ているはずの我がチームのサポート隊を待つことにした。皆に手を振り道端に座り込み、サポート隊を待った。しかし、なぜか後援会が来ない。僕はいつしかモリーニのかたわらで寝り込んでしまった。

気がつくと、朝日に照らされたモリーニのそばに心配顔のシニョーレがひとり立っていた。何か言葉をかけてくれたがわからない。とりあえず、「ボンジョルノ」とあいさつする返事をくれた。心配そうに僕の顔をのぞき込む。「体は大丈夫か」と聞いているみたいだ。立ち上がり、「ベーノ、ベーノ」と言いながらほほえむと、安心したようにシニョーレもほほえんだ。「でもね、カテーナが切れちゃって、バイクが動かせないんだ」と言うと、「ついてないね、まったく。仲間はどうしたんだい、メカニコはいるんだろう?」というようなことを聞く。「皆違う道を行っちゃったみたいだ。セルヴィツィオがくるはずなんだけけど…」と言うと、そうかそうかというふうにシニョーレはうなずいて腕を組んだ。僕も腕を組んだまま走ってきたほうを見つめる。

だがモトもマッキナ(車)も来ない。シニョーレはさっきからずっとそばに立ってくれている。すると、通りかかったボリツィアまで止まって、大丈夫かと声をかけてくれた。「大丈夫、大丈夫」と言うと、ひとりのボリツィアが、「2~3キロ行くとSS9に交差するから、そこを右にイモラのほうにまた2~3キロくらい行けばバイク屋があるからそこへ行ってみろ」というようなことを親切に教えてくれた。「グラツィエ」と礼を言い、移動することにした。「あー、ついてないな。こんなところでバイクを押すハメになるなんて



ターラントまで50kmほど。競争のタイムコントロールである。このへんまで来ると妙にアフリカっぽい



左がショパンニさん、右がオスカールさん。ベネリの175ccとモトグッフィ・アストーレ500ccで参加。下はもちろん切れたチェーン。

…革ジャンをタンクにかけ、切れたチェーンをシートにのせ。低いクリップオンハンドルに両手をそえて、僕は朝日を浴びながらモリーニを押し始めたのだった。

小さな軽いモリーニが、そのときの僕にはとても大きく重い存在だった。押しても押しても前へ進まない。もう何十キロも押したような気がするのに。いつの間にか8時を過ぎ、勤めに出かける車が急に増え、道が混み始めた。

SS9に出て1キロくらいたったところでアッジップのGSを見つけ、そここのシニョーレに聞いてみると、あと5キロくらい行くとバイク屋がある。今はキューゾ（休み）だから屋にはアベルト（開店）だから行ってみろ、なんて意味のことを言う。といった。しようがない。とにかくチェーンさえなんとかなれば、ペーサントにたどり着くことができるんだ。「あーあ、普段ここまで行っちゃったかな…」、1日目のアリーボ（ゴール）は、アドリア海に面したリゾート・ペザロだ。(10時47分に、最初のクラスが開始する予定だ。僕は7時30分にイーモラのコントローロ・オーラリオに間に合わなかったばかりか、イーモラの手前25キロあたりで、ひとりぼっちでモリーニを押し歩いていたのだった。だんだんと照り付ける日差しが強くなる。頭がボーッとして汗が目に入り、前がよく見えない。このまま、僕のミラノ・タラントはリタイアになってしまふのかな…と思いつらちになる。

気を取り直して歩き始めてすぐのことだった。どこからともなく天使の声が聞こえてくるではないか！ そう。そのときの僕にとって、それは紛れもない天使の声だった。とてつもない感動が聞こえてきたのだ。バイクだ、バイクの音だ、助かった！ と思った。この近くにオトキチがいて朝からバリバリやっていた、そう思った。この音をたどっていけばきっとこの音の主に会えるだろう。会えればなんとなるか、きっと助けてくれる。僕はそう信じた。そして力を込めてモリーニを押し、懇心地へ急いだ。だんだん音が大きくなる。このへんだ。そう思って路地をのぞき込んだ瞬間、僕の目の前に2人のひげ面の天使が、赤い2台の女神とともにいたのだ！ 「チャオ！ ジャボネーゼ、どうしたんだい？」天使のひとり



セイモア・フロヴィー、10



**MILANO-TARANTO**

PERCORSO	
PERUGIA (trasversale)	C.T. 4
S. MARTINO IN COLLE (COU) (R)	C.T.
Rapino	—
Pieve di Rosciano	—
Ditta (CT)	—
Cascia	—
Castiglione	—
Poste di Penna (CT)	—
La Bruna	—
Spoltore (CO) (R)	—
Terni (CO) (R)	—
Narni (CT)	—
Chiusi Castellina (COU (R))	—
S. Onofre	—
Montefalco (CT)	—
Montefalco Silano (CT)	—
Pergola (CO) (R)	—
Palombaro	—
Valfabbrica (CT)	—
Frasassi (CT)	—
Isola del Garda (CO) (R)	—
CASSINO (atmos)	—

REDAZIONE ITALIANA  
EDITION ITALIANA  
EDITION ITALIEN

SPONSOR UFFICIALE  
MAGNETI MARELLI

VETERAN MOTO CLUB S. MARTINO IN COLLE	
MILANO-TARANTO	
4° RIEVOCAZIONE STORICA MILANO-TARANTO	
R. CONDUTTORE	44
CATEGORIA	40
VEICOLO	250cc
MANICA MOTO	MONTBRI
COGNOME	ITO
3° TRATTO: PERUGIA - CASSINO 19 Luglio 1990 - Km. 262	
SPONSOR UFFICIALE	
BENELLI	

思つと、オスカールは僕の肩を抱き、「いいものがあるんだ、とておきて奴さ、今見せてやるからあっちへ向こう」そう言うと立ち上がり、ティッタさんのルノーへ向かった。  
「おい、ジョヴァンニ、あれを出してくれよ。例のとておきを」ニヤニヤしながらオスカールが言うと、「あれか、いわゆるひとつの神様って奴だな」なんてことを言いながらニコニコ顔のジョヴァンニは、ルノーのハッチを上げて何やら物色はじめた。「いいかい、ジャボネーゼ。このダンボールはベネリのバーツ。こいつはグツツイ。で、こっちがベネリで、こいつがグツツイ」と、おい、こいつがいいんだ。よく見ろよ」と言って毛布を引き取ると、そこにはベネリのキャブ付きエンジンが！ 基づかれていたのだった。

「マニー・フィコ！ スッゲエ。さすがだよ。僕がうなっていると、オスカールが胸をたたきながら、「こんなんて燃熱してちゃいけねエ」と言い、ベネリのエンジンに毛布をかけた。ジョヴァンニは最後にひとつの工具箱を持ち上げた。

「いいかい、ジャボネーゼ。今からお見せするのが、いわゆるひとつの神様って奴だよ。そう言って扉を開け、ジョヴァンニがジャーツとのばしものは…」

「カテーナー！」、そうカテーナー、新島のキラキラ油光りするチェーンだったのだ。僕は、うれしくてうれしくて涙が出そうだった。そして、またまたジョヴァンニとオスカールのイタリアマンザイをフィーチャーして、モリーニのチェーン交換は拍手喝采のうち無事終了し。気がつくと真上に昇った太陽がニッコリとほほえんでいるのでした。

「さあ、手を洗ってお昼にしましよう。ティッタさんの声に振り返ると、ルノーの横にはテーブルとイスが置かれ、テーブルにはヴィーノ（ワイン）のボトル、アックアミネラーレのボトル、たくさんのがパニーノ。それにグラムが山のように…。思わず心は「グラム」なのでありました。

ティッタさんとジョヴァンニ、オスカールと僕は、紙コップに入れたヴィーノ・ピアンコでサークル（乾杯）し、まだ始まったばかりのミラノ・タラントの長い長い道のりを思い、お互いの健闘を祈ったのでありました。

がんばってつたないイタリア語でいいさつをしたジャボネーゼの僕は、ベネリのジョヴァンニ、グツツイのオスカール、サポート隊長のティッタさんと、握手を交わしたのでした。「ユーキ？ ユーキ？ ユイチ？ 言いにくいい、ジャボネーゼ。まあいいや、こっちへ来いよ。手招きに応じてベネリのそばに行くと、「ホラ、見てみろ。これが新品のイグニッショングイルだ。オーヴォ。カピート？ さっきのはダメ。コレはOK。こうやってクレードルにビニールで巻きつけて…もうだいじょうぶ。トゥットウ・ベーネ！」 そう言って、ジョヴァンニはニコニコ顔になった。僕も笑った。

「おい、オスカール。アストーレはどうだ」ジョヴァンニが聞くと、オスカールは右手をひらひらさせながら、よくもないくど悪くもないよといった調子で、「いつもと一緒だよ」と、笑いながらヘッドまわりのオーリオを手でぬぐっている。どうやらオイル・ラインのアルミパイプに亀裂が入っているらしい。ベネリが一応直ったのでジョヴァンニと僕はオスカールのところに行きグツツイのリバラーレを手伝うこととした。といっても、手を油まみれにしてがんばるオスカールをからかうただの見物人だったんだけど。

ジョヴァンニとオスカールのイタリアマンザイを聞いてい



主催者のサバティーニさんもモンディアルの250ccで走る、抱き合せ